

刊號：2017年7月11日 星期一 / 郵政特准掛號認爲新聞紙類 / 零售每份新台幣100元 / 訂閱：國內每月新台幣300元 國外每月新台幣400元

春燈

2017 July

7
月号



主宰の句

安立公彦

春惜しむしばしを蕉翁句碑の辺に

(清澄庭園)

遙かなるものに青春別れ霜

木々挙り天指す夏に入りにつけり

ひとすぢの光芒いまも辰雄の忌

明眸のひとり仰げる新樹かな

(偶見)



成瀬櫻桃子の句

マーラーの「巨人」が揺らす新樹かな

「俳句」(平成六年)

「の中」さん「ごとき」さんとつきあわないように、
名詞と季語のみの句が理想、先生の折にふれての片言隻
句が、いつも私の脳裏に甦る。

先生はよくマーラー「巨人」(交響曲第一番)が大好きと言われた。時折この曲を聴きながら、書齋での仕事を進められたのかも知れない。ふと窓の外を眺められた景を、すかさず句にされたのであろうか。

橘 正義

成瀬櫻桃子の句

銀河渡つてゆけば近みち遠き子よ

「春燈」（平成三年）

この句に先生の親としての辛さや哀しみを深く感じます。親として出来る限りの事をして、これで満足という事はないでしょう。親子の縁は本当に深いものと思えます。

先生は俳句という世界の中で充分にお嬢様を詠い、天与の宝として情愛に満ちた人生を過ごされた事と拝察いたします。どうぞお嬢様と共に素晴らしいひとときをお過ごし下さい。

都丸美陽子

燈下集



○ 西川保子

ペン措くや聴くともなしに春時雨
口中に錠剤溶かしつつ暮春
巣箱かけし少年のいま知らざりき
かばかりの風に戦き二輪草
三鬼忌やときに歪に鳶の輪

○ 佐藤信子

切株にのこる湿りや花曇
堂塔を雨に煙らせ仏生会
をりからの花も名残りや札所寺
花冷と思ひしよりの花疲
厄除けの鐘撞いて春惜しみけり

○ 藤丸誠旨

○ 片桐てい女

筍梅雨完治の傷のうづくかな
ぐつと唾のみ込んで会ふ夜の桜
青春奪ふ戦よあるな昭和の日
杖捨てて野を駆けめぐれ昭和の日
草矢射て兄のおさがり疑はず

くわんおんの御目二十二藤の花
間歇泉噴いて諏訪湖の春暮るる
少しだけ夢をつなげて夏に入る
爪先に早夏を聴く海ほたる
お好みのお木の苗を買ふみどりの日

○ 懸林喜代次

山羊の乳搾る体験遠足児

猫パンチ食らふ大きなしやぼん玉

船酔ひやもう懲りごりの観潮船

軒連ね旧街道や初つばめ

桜葉掃き寄せ春を惜しみけり

○ 豊谷ゆき江

がま口に探る小銭や花の冷

拡大鏡さがす机や春の塵

庭に向く介護ベッドや竹の秋

初つばめ町にうはさの洋食屋

何時からか馴染めぬままに昭和の日

○ 赤岡茂子

春の土手なないろ日和となりにけり

振付けは気ままな風よ糸柳

物申す諸手ついたる蛙かな

草萌や土手に広げし握り飯

堤防に寝ころび春を惜しみけり

○ 後藤眞由美

春風や堂の柱のエンタシス

桜回廊十石舟の遊山かな

花片の散り込む風の万華鏡

そぼ降るや白き炎の雲珠桜

桜さくら源氏美学の襲かな

○ 川崎真樹子

いちどきに咲き北国にわつと春

花見人縫うて電動車椅子

人といふ水の器や臍めき

天使マークのキャラメル工場春の虹

真つ当に生きてをるかど青田風

○ 木村梨花

逝くひとに紅さず春の別れかな

巣立鳥心残りの少しあり

あたたかや又ほどけたる靴の紐

中空を風のきままや柳絮とぶ

春の夜の長き手紙となりにけり

○ 溝越 教子

古井戸に乾ぶ簀子や花大根 (生田緑地四句)

鳥帰る大地に根差す「母の塔」

支へられ枝百畳の桜かな (辨形山)

鬼女ひそむ路かも知れぬ桜の夜

ぼうたんのゆつたり揺れて刻うごく

○ 齋藤 晴夫

清明や真澄の空を飛行機雲

そばへ過ぐ柞の枝の小鳥の巢

鳥雲に人それぞれの流離譚

鶯の途絶えて淋し式内社

閑けさにかそけき音を落椿

○ 坂入 妙香

芽柳の濃き川端や乳母車

降り出して音の高まる穀雨かな

蘇る庭の草々穀雨止む

蘭学事始聖ル力通り花万朵

墨堤に風のいたぶる花吹雪

○ 河崎 國代

若芝やホップウオークの鳥戯る

春眠の擒となりし一車両

紙風船濁世を払ひ高み指す

黙のまま箸置く二人春愁

水琴窟の無色の音や夏きざす

○ 上野 進

酌すればますます本音春落葉

予後の脚休め見飽かぬ花筏

柚子剪定棘のいくらか枝に置き

在不在問はず空家も躑躅燃ゆ

碧天へ十字架真白聖五月

○ 石橋 邦子

ふる里の山はるかなり昭和の日

抱卵の雉身動がぬ草の中

うまごやし煙まつすぐ上りけり

はつ夏の水奔りだす傘雨の忌

阪東太郎の水引き始む田植かな

当月集

安立 公彦選



○ 荒井ハルエ

降りること忘れてをりぬ揚雲雀

落ちゆくは谷しかあらず紅椿

今さらの母への詫びごと亀鳴けり

咲き満つる桜に雨の募りけり

賑はひの熱り冷ますや夕桜

○ 永井恵子

麴焼くや飛散る香り春の昼

桜葉降る陸軍墓地の忠魂碑

東西に廻す地球儀イースター

穀雨かな仕立て直しの紺緋

朧夜の夢で逢ひしは皆故人

○ 大森道生

青葉寒陸奥の復興遅々として

てつせんの咲いて夕月かかりけり

全身の力を発条に田搔牛

菖蒲葺く脇本陣の軒庇

風渡る麦の穂波を光らせて

○ 持田信子

油屋の帳場錢箱春ともし

合掌造り目に十枚の春障子

忠敬の歩測の道や青き踏む

思はざる桜吹雪に出合ひけり

芋植うる待つひとありと語りつつ

○ 佐藤玲子

此処にまだ日本たんぼげ群生す

石引きの清正公像樟若葉

名古屋城復元半ばの五月かな (名古屋句)

鯨を見る展望室より夏に入る

聖五月娘の娘に男の子産まれ

春燈の句

安立 公彦選



水底に影引く雑魚や春深し

東京 佐俣まさを

坪庭のかすれ箒目花の塵

靴底に旅の小石や花は葉に
簀え立つ天守の庭の吹流し

神奈川 丸山 允男

茎立や抱ふる夢の二つ三つ

薔薇咲かす庭の至福や俺住ひ
杖の戦友会へば若やく侘五月

瓜揉や五勺の酒を持って余し

母の日や呼んでもみたまき母の名を
何も彼も夢となりしや著我の花

ランドセル大きく弾み犬ふぐり

東京 佐藤まさ子

俳句また文化財とや風光る
若き等の肌の輝き薄暑かな

一列に同じ背丈の葱坊主

広島 川崎 雅子

群れて来て枝撓はせる雀の子

粽解く娘の指長くしなやかに
しづけさに手帳見てをり仏生会

乳母車押す母の背の暮春かな

神奈川 新海 英二

甘誘をさらり断り春の昼
バラードの弾き語りまた宵の春

行く春を園児の列について行く

千葉 平沢 恵子

青春の匂ふ校庭大桜

磨ぎ汁に五指うすうすと春の夜
叱られてそつぽ向く子や葱坊主

いつときをすがた整へ花筏

神奈川 宮崎 洋

蹴躑赤し話途切る窓の外

はからずも老鶯に逢ふ妻の墓

神奈川 宮崎 洋

掛軸の女ほほゑむ目借時

春の山どこかに指揮者あるやうな

神奈川 宮崎 洋

春風の結ぶ生きとし生くるもの

東京 山口 地翠

余言

安立公彦

青春奪ふ戦よあるな昭和の日

片桐てい女

「昭和の日」は四月一九日。この日はもともと昭和天皇の誕生日で天皇誕生日だったのを、年号が平成に変わったのを機に、「みどりの日」と変更、平成一九年に、「昭和の日」と改称されたもの。みどりの日は五月四日に移行した。戦前の小学生は、天皇の元号を、ジーンム、スイゼイ、アンネイ、イトクと棒読みに暗記したものだ。つた。

作者は、同じ燈下集の、赤岡茂子、齋藤晴夫のお二人とともに、大正一〇年代の作家である。心身ともにお元気な三氏だ。この句、「青春奪ふ戦よあるな」は、まさに万民の祈りを代表する言葉である。卒寿を過ぎて些かの衰えもみせないこの情熱は素晴らしい。

切株にのこる湿りや花曇 佐藤 信子

短歌俳句の方法論の中で、正岡子規の説いた「写生説」は、その中心に位置する実践法である。俳句に例をとって

も、主観のみでは俳句は成り立たない。ものの有り様をしつかりと見極めてこそ、主観も生きてくる。

この句、「切株にのこる湿り」は、切株という樹木の状況と、湿りという自然の現象を、みごとに一句に納めている。それは更に、「花曇」という季語を得て、抽んでた作品となっているのだ。

花仰ぐ面影を身に添はせつつ

高橋 和女

昨年一二月二日に逝かれた夫君への追悼句。長い間、車椅子の生活を余儀無くされていたと聞く。毎月の出句には欠詠などなかった作者だったが、一月号に句は無かった。季節は巡り、今桜の咲く頃となった。ご夫君の元気な頃は、ともに仰いだ桜である。「面影を身に添はせつつ」は哀切の上もない思いたが、しかし一句は情に流されていない。俳句は表現詩である。この中七下五の作品としての完成度は、作者の思いをみごとに言い留めている。

ふらここの何語るでもなく二人

吉川 隆

四月開催の同人会総会に続く俳句会で特選に戴いた句。単に「ふらんこ」と言えば、街中の小公園にある子供の遊び道具に過ぎないが、「鞆鞆」「ふらんこ」と表記を改める

と、言葉に歴史の影を感じる。鞆が蘇東坡の、「春宵一刻直千金」の詩に詠まれているのは周知の通り。

この句、「何語るでもなく二人」が善い。この二人は若い男女。これだけで充分に一つの世界を為している。しかも何とはなしに鞆の影を感じるところに巧みさがある。

母の日や箆笥の隅の割烹着

今井 弘雄

北アメリカ出自の「母の日」も、すっかり日本に定着した。カーネーションが「母」にふさわしい。一方「父の日」の出自は母の日に遅れること三二年。歳時記も、母の日ほどには定着していない、と書いている。

この句、母の日を割烹着で象徴しているのが庶民的で善い。平素はあまり開けることもない箆笥の、その隅に母の割烹着を見た作者の心情が、母への感謝の思いで表現されている。母と割烹着は、時代が変わっても一体だ。

花筏旅路の果に見るは海

竹内 慶子

この「花筏」は落花。小川から大海へ流れ、その果ては広大な海に漂うという花筏の行く末を詠ったもの。この句の前に、「春病みて老齡の坂越え難し」の句がある。

二年前に夫君を亡くされ、今また病と向き合う作者。心

身ともに疲れは大きいと思う。しかし知友拳って回復を祈念している。この句、海が見えるということは、その海に浮かぶ島影も見えてくるということでもある。また五句目の句、「田水張るびちびち跳ぬる命たち」には、躍動する生命が漲る。作者の回復も右肩上がりと信じている。

古民家の歲月つなぐ花明り

清水 美子

第六回神奈川支部大会での作。民家園を訪ねるのは二度目だった。丘陵地を利用した各地の民家が、それぞれの地域の生活を写して建っている民家園は素晴らしかった。鶯が鳴き、早咲きの桜が咲いていた。作者はそれを、「歲月つなぐ」と表現している。正にその通りの姿である。景の美しさに見惚れることなく、その景の一部にしっかりと焦点を当てている。季語の「花明り」も佳い。

春風や堂の柱のエンタシス

後藤眞由美

「エンタシス」、聞き馴れない言葉だが、建築様式の一つ。円柱の中間部のわずかな膨らみを言う。パルテノン宮殿ほかに例を見る。法隆寺金堂の柱も同じである。

「堂」はもともと格式の高い建物を指す言葉だった。金堂は寺の本尊を安置する仏堂。その柱にエンタシスを見て感じ入る作者。「堂の柱のエンタシス」と、流れるような表現が適切だ。「春風」がその円柱を柔らかくつつむ。